投稿

また奪われた六名の生命

戦後の日本の石炭産業史のなかで、もっとも大きい惨事といわれた昭和三十八年十一月九日の、三池炭鉱三川鉱の炭じん爆発は、一瞬にして四百五十八名の尊い生命を奪い、さらに一酸化炭素中毒による八百三十九人の苦しい闘病生活がはじまり、今日も続いている。

実際上、このときから「命と暮らしを守る」闘いがはじまり、やがて犠牲者たちの第十八回忌を迎えようとしている。

今年の六月、三池労組が進めている「命と暮らしを守る闘い」に対応するかのように、「前チェック」「自主保安」と、言葉だけを強調する、会社と新労組の安全運動が進められだした。そのなか、三川鉱の坑内――本層七〇部内において、またも六名の坑内労働者の生命が奪われた。この惨事もまた、会社が強調する「前チェック」「自主保安」という、ぎまん的な保安施策の結果と受けとめるべきである。

これを機会に、「前チェック」「自主保安」を強調する、三池炭鉱の保安運動は一体何なのか、今後どうすればよいのか、いくつかの問題を提起したい。

職場はなぜ口を結ぶ？

保安標語ばかりが素通り

もと三池新労組員　坪内安衛

三池大爆発18回忌に寄せる　その一

三川鉱が掲げている保安標語。この影で死んでいき、また傷つく労働者は、果たしてどれだけいることだろう。

危険箇所を指摘する勇気を

「前チェック、この次よりも今すぐに」、という保安標語が坑内にもよく見られた。この標語にはまったく賛成である。

さて問題は、「前チェックや安全の再確認ができているのか」ということで、もしできていないとすれば、それはなぜなのか。

三川鉱坑内の、本層七〇部内の重大災害（落盤によるものだった）の原因と今後の対策について、会社と保安対策委員会から立派な提案があったと思う。労働者はその提案に、納得したであろうか。

現在、坑内で作業を進める労働者は、なぜ主席に、また係長に、「まず安全を確保してから」、といえなかったのだろう。

会社はきっと、係員に「まず安全を確保してから作業を進めろ」といったであろう。

しかし現実は、いつの場合でも採炭払新設の際は、追い詰められた日程で、各職種の労働者が、狭い坑道に交錯して作業を進める。時間が足りなくなると、労働者はその日の作業量を消化するため、無理な手順で作業を進める。係員も、これを黙認する。

こんな状況の際に、「安全を確保してから」などという労働者がいたとすれば、その労働者は、「アゴの多い奴」「ゼンにならん奴」といわれて、請負作業から日推進の仕組みの中で、危険な所を「危険だ」と指摘し、「まず安全を確保してから」といって作業を進める人が、幾人いるだろうか。六月のあの大惨事の状況から推察して、最初から危険な状態であったはずである。そのとき、「危険だ。安全を確保してから」という勇気ある労働者がいたら、といまも悔いが残る。

あのとき現場を指導していた係役作業にまわされる。これが坑内現場での労務管理の現状である。

請負作業から日役作業に替わった場合、その賃金は仕繰員で約二千円位い（もちろん一日に）も少なくなり、機械や電気関係の労働者の場合は、さらにその賃金の格差は大きくなる。ということで、たとえかりにいいたいことがあっても、「固く口を結ぶ」ことになってしまう。

その結果、「前チェック」「自主保安」を強調する、保安対策上の「たてまえ」だけが素通りしていき、重大災害はくりかえされる。

（次号へつづく）

×

筆者は現在、三池炭鉱を退職のあと、「佐賀県伊万里市大川町東田代」に居住されています。

あきれたお義理訓練

フロのなかで屁ふるような頼りなさ

――一組合員

持ち下がり品を持って、一人遅れて坑内（三川鉱）に下がる人車の中で、機械工の一人が言った――「今日は退避訓練（危険発生に備えて）があるので、仕事の段取りをかえなんたい」。

休憩所へ着くと、仕繰工の仲間も「十時半から退避訓練があるので、終ってから現場に行ってもすぐもどってこなんけん、終ってからすぐめしにして、その後仕事に行くばい」、と言った。

また、固定局（無線によって、坑外の指揮機関と連絡し合う坑内無線の拠点）の人も、係員も、十時半に退避訓練があると言った。

さて、たしかに十時半に連絡があり、十五分くらいで非常集合場所に集合した。

みんな、がやがやとさわぐ。誰かが「だまっとけ」、と言った。それでも後ろの方では、小さい声でなおぶつぶつ、つぶやく者がいた。

責任者は、早く訓練の状況を説明しなければ……、と思っていたら、後ろの方から仲間たちが、がやがや言いながら現場にもどっていった。

「あれ、訓練は終ったつかな」というと、側の仲間も「そうらしいな」、とぼつり。早くも、めしにかぶりつく者さえいた。これでは保安のための退避訓練が、まるで金もうけのじゃまとでも言うようだ。（坑内労働は多くが請負給＝出来高払いだから）

これでは明らかに、会社は労働基準局の手前、お義理でやっているし、また労働者も、知らず知らずのうちに会社の考え方に乗せられているな、と思った。

退避訓練は言うまでもなく、これまで坑内で殺されていった仲間達の尊い血の教訓から始まったもので、それだけにどれほど重要なことか。

その重要な訓練を、第一に生産がスムーズに行くよう、作業に合わせるようなことなど問題だ。

第二に、せっかくの説明を、フロのなかで屁をふったような、いったいどこまで言っているかわからない、小さな声で言うなど問題だ。もっと、みんなにわかるように言ってもらいたい。不測の事故の発生に備えて、敏速に退避するためにする訓練だ。

会社は、このような訓練は、もっと真剣にやらせなければならない。このこともまた、保安向上へつながるものではないか。

×

ここに、職場保安上の重大な問題が告発されています。私たちはこのように、命、暮らし、保安上の問題点は絶対のがさず、告発していこうではありませんか。

――編集部

手記

定年間近にして思う

退職後のことで頭も心も重い

――定年近い一組合員

いよいよ定年を間近にしてみると、退職後どう生きるか、それよりもまずどこに新しい住居を定めるか、大きな問題が心の上に重くのしかかってきた。

会社を退職する以上、最終的には、どうしても社宅を立ち退かなければならない。「しばらく社宅にいたら」、といってくれる人もいるが、社宅に長くいると、その間にも土地や家の方が値上がりしてしまって、ますます家や土地を買えなくなってしまう。だから、一日でも早く社宅からは出る方が明らかに得策だと思う。

それには、まず土地が要る。土地は、どう考えてみても荒尾。大牟田よりは、幾らかでも安いという話である。それでも、坪七万円ぐらいはするらしい。

今社宅にいて、約十三坪ぐらいの家に住んでいるが、今後住むとしてはこれでは狭い。どうしても二十五坪程度の家がほしい。

幾らか残る庭では、たとえ狭いものでも家庭菜園の楽しみぐらいはやりたいものである。

このように見てくると、土地は少なくとも七十坪程度は要る。荒尾で、今土地が坪七万円というから七十坪とすると、土地だけで四百九十万円もかかることになる。

家の建築の方はどうか。建築費は、坪の三十五万円といわれる。とすると、二十五坪の家を建てるとして、八百七十五万円。なんと土地と家に要る金を合計すると、一千三百六十五万円。

では、私がやがて手にする退職金の方はどうか。特別休暇手当二百日分を加えてさえ、一千二百万円程度でしかない。明らかに、退職金では家は絶対に建たないのである。社内報の〝くろだいや新聞〟によると、会社の造成土地でさえその売価が坪十二万円もしている、というのだから何をかいわんやである。

ところで、退職問題について、一年ほど前まではそれほど深刻に考えてはいなかった。それが、定年の半年前になってくると、そのことが一日じゅう頭から離れなくなってきた。血圧があがるような気がして、心が重たい。たとえ、退職金を全部はたいて家を建てたにしても、私たち坑外労働者の場合、厚生年金が支給されはじめるのが六十歳からである。退職となる五十五歳から六十歳までを、いったいどうやって食いつないでいけばよいか。

このように考えてくると、いよいよ心が重くなり、目の前が真っ暗になるのである。

訂正とおわび

本紙前号のこのページの、中原書記長の手記「今、北海道の炭掘る仲間は？」のなかで、一番上の段に、「出炭計画は年産九十二トン」、「露天坑での三十八トン」としましたのは、「九十二万トン」と「三十八万トン」の誤まりでした。訂正しておわびします。

――編集部

ありがとう×××××

三代目はたかぜ号

昭和四十六年からの十年間、常に組合員・家族とともに活躍してきたニュースカー〝三代目はたかぜ号〟だったが、炭労の第七次石炭政策闘争の全国キャラバンを最後に、任務を終わった。

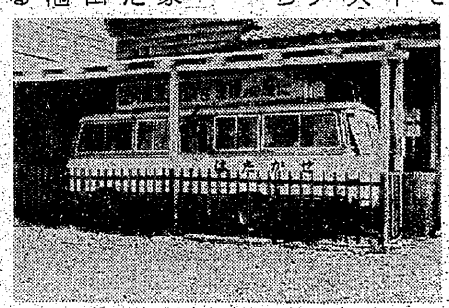
すでに〝四代目はたかぜ号〟に任務が引き継がれ、闘いの前進のための活動は続いている。

さて〝三代目〟は、今四山前指導部前の庭に、つい先ごろまで組合員・家族に限りない勇気を与えていたその雄姿を休めている。

組合は、その雄姿を、闘争記念の一資料として長く保管していくことを決めたが、九月二十日、四山の面々、ダイク（大工）さんならぬ、ダイヒチ・ダイハチ（もちろん組合員）たち十人ほどが集まり、〝三代目〟のための家をつくりあげた。

ついこの間まで、組合員・家族とともにあった〝三代目はたかぜ号〟は、これからは前四山指導部の庭からジーッと、三池の今後の闘いを見守ってくれることだろう。

〝三代目はたかぜ号〟よ、ありがとう。



（写真は、体を休めた〝三代目はたかぜ号〟の雄姿）